

講演「研究や事業の成果を見せるまとめ方 基本編」

講師 同志社女子大学 生活科学部食物栄養科学科
教授 小切間 美保先生

管理栄養士・栄養士に期待される像とは「栄養・食を通して、人々の健康と幸福に貢献すること。栄養学を学術的基盤とし、栄養・食を手段として、さまざまな人々の健康はもとより、より広義の well-being に寄与する専門職であることを、明瞭簡潔に表現されている。

近年、管理栄養士・栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラムが話題となっている。今回は、管理栄養士・栄養士として求められる基本的な資質・能力である「栄養の専門職としてのアドボカシー能力」「科学的態度の形成と科学的探究」に重点を置いた研修会であった。就業年数5年以上の日本栄養士会会員の一部に対し行われた“現在の仕事で求められる資質・能力の重要度”の調査では、コミュニケーション能力や他職種との連携・協働などの重要度は高い。一方で、研究遂行能力、論文抄読能力、学会発表能力が圧倒的に低いことが示されていた。

研究は専門職が業務を改善していくプロセス。実施した業務の評価・改善の実績を形にする（数値化する）ことで他職種や行政からの理解が高まる。業務を改善する力、能力向上につながり、これが「研究力」である。構造化論文

は①タイトル②要約③緒言④対象および方法⑤結果⑥考察⑦抄録⑧謝辞、利益相反⑨引用文献で構成する。緒言は①背景②目的③研究仮説④先行研究と今回の作業仮説との関連を簡潔に記述する。目的は「誰に」「どの場面で」役立つのか、実現の可能性を念頭に置く。研究計画を練る段階で、①材料②対象③研究方法④統計的解析法⑤倫理的配慮を算段する。明確な目的と入念な計画により、研究内容はまとめやすくなる。その後、図表と文章で「見える化」し、論文・報告書で伝えたいことが論理的に示せるように順序を決定する。

他職種が栄養の分野を研究してくれるわけではない。内輪で褒め合う、「頑張った!」と自己完結するだけではなく、栄養・食に携わるものが世に発信していくしかない。こんなことを論文にしているのかと思う内容でも、論文にしてみる事が重要である。完璧を求める必要はなく、自信を持つ。自信を持つために、自身に投資し能力を高める。ネット等で簡単に情報が得られる社会の中で、管理栄養士・栄養士の社会的役割はなにか、何を期待されているのか。示唆に富む講演であった。

(文責 医療 越智恵美)

「スキルアップ研修会」に参加して

(学校健康教育 石川幸奈)

今回のスキルアップ研修会では、栄養士会の運営、管理栄養士・栄養士の社会的役割、研究や事業の成果を見せるまとめ方についての講義がありました。また、職域ごとに分かれての交流もありました。

研修に参加して学んだことは、管理栄養士・栄養士は専門性が高い職業であり、大学等の卒業後は自分の力で学び続け、スキルアップしていく必要があるということです。普段仕事をしていて悩んだり、困ったりした時、職場に同じ職種の人がいないのですぐに解決することが難しいと感じます。それを解決するためにも、常に学び続ける姿勢が重要であると改めて実感しました。栄養士会で実施されている研修会にも、無理せず自分のペースで参加し、新しい知識や情報をアップデートしていきたいと思えます。

同志社女子大学の小切間先生の講義では、「管理栄養士・栄養士はなぜ研究が必要なのか?」という問いがありました。お話を聞いていて、自分だけでなく同じ業種の業務を改善したり悩みを解決したりするため、という理由がとても腑に落ちました。わからないこと、根拠がないことは自ら研究し、自らエビデンスを作っていくことが重要であると感じました。また、他職種へ管理栄養士・栄養士ができることのアピールをしていくことも非常に大切だと思いました。自分の業務を周囲に理解してもらうことの必要性は日々感じています。自分ができることを理解してもらうと、周囲から頼られやすくなったり、力を貸してほしいと声をかけられやすくなったりします。そのような時、管理栄養士、栄養教諭としてのやりがいを感じます。研究という形を通して周囲へのアピールをしていくのも一つの手段であると学びました。

最後の職域部会ごとの交流では、公衆衛生部会の方ともお話しできました。職域の異なる管理栄養士・栄養士はどんな仕事をしているのか、知らないことも多かったです。公衆衛生部会と学校健康教育部会の共通点は「食育」をしている部分であるという話になり、地域の管理栄養士・栄養士と学校の栄養教諭がタッグを組んで食育ができると面白そうだなと感じました。これからも社会が必要とする管理栄養士であり続けるために自己研鑽を重ねていきたいです。